

©東京新聞2012年10月17日



体調が悪くて診察を受けに行けない時、昔ならば近所の開業医が「往診」をしてくれた

## Dr. 松井英男の在宅医療のカルテ



### 第三の選択

ものです。自宅で療養中に回復しなければ、それは残念なことですが、誰もが「死」を受け入れていました。

ところが、医学の進歩で多くの命が助かるようになると「病院で治療を受ければ助かる」という錯覚が生まれました。現代医学は加齢や、その先にある死までもコントロールできると、誤解されてしまったようです。

余命が長くないと分かっていても、病院で過ごすことも多くなりました。いずれは死が訪れるという厳然たる事実を避けようとするのは、人間のさがかもし

## 外来でも、入院でもなく



患者の自宅を訪れけがの治療をする松井英男医師(中)＝川崎市で

れません。

本当は、回復の見込みがなければ無意味な積極治療を避け、住み慣れた家で最後の時間を過ごすのがごく自然な流れです。が、家族構成が変わり、地域の受け皿も不十分で、実際にできないケースは少

なくありません。

在宅医療とはこんな現状に、外来でも入院でもなく、家での診療を提供する「第三の医療」です。私は約二十年間、外科で胃がんの手術を担ってききました。二〇一〇年に川崎市高津区で在宅療養支

援診療所を開業し、百五十人ほどの訪問診療をしています。月二回の定期訪問と二十四時間の電話対応、訪問看護師や病院との連携、緊急時の往診が主な役割です。

一口に「通院困難」と言ってもいろいろな病気があります。一番多いのががんなどによる終末期医療。次いで認知症です。多くの患者さんには複数の病気があり、年齢は中央値で八十二歳と高齢で、ほぼ全員が介護保険制度を利用して日常生活を送っています。

次回から、この訪問診療の現実をお伝えたいと思います。

(川崎高津診療所院長)  
 〓 次回は三十一日掲載